

郡内地方巡検

荒木 美智子

去る7月30・31日の両日、内藤先生の御指導のもと、大学院生6名が参加し、郡内地方巡検が行われた。郡内地方は、秩父山地から御坂山地へと続く分水嶺によって国中（甲府盆地側）と隔てられた桂川流域の地域で、平地が少なく、耕地が狭隘なため、古くから絹織物業が盛んであった。しかし戦後、伝統的な絹織物業や、古くからの商店街が衰退する一方で、首都圏に近接することから住宅団地や工業団地の造成、大学の設置などが進んでおり、今回の巡検の目的は、こうした郡内地方の現状を考察することであった。

初日は、中央線高尾駅に集合し、まず上野原町の四方津駅で下車して、現在分譲中の「コモアしおつ」を見学した。計画戸数1,630戸、計画人口5,635人のこの住宅団地は、山を切り崩して造成されており、四方津駅の眼前にあるにもかかわらず、駅との標高差は約90mもあるため、駅からの交通手段として、近未来的な感じのするガラス張りの斜行エレベーター（実際乗ってみるとロープウェーみたいな感じであった）とエスカレーターを利用する点では画期的である。事業主である建設会社の方のお話によると、この住宅団地は、東京および甲府の通勤圏内にあり、すでに東京方面への通勤者の入居も始まっているということだった。

午後からは富士吉田市にある「山梨県富士工業技術センター」を訪れ、職員の方のお話を伺った。このセンターは主に織物業関連の技術の研究や業界指導を行っているが、近年、この地方の産業構造の転換を反映して、機械工業部門の技術の研究も始めているという。郡内の織物業に関しては、夜具地・座布団地のほか、近年ではネクタイ地の生産が盛んであること、若年層の東京への流出などから労働力の高齢化や廃業が進んでいる一方、機械化や製品の高級品化が進んでいることなどを説明していただいた。また、「レピア織機」をはじめとする先端技術を利用した様々な機械も見せていただいた。

次いで富士吉田商工会議所の方に、車で市内を

案内していただいた後、商店街の現状についてのお話を伺った。富士吉田市の商業は山梨県下では甲府市に次ぐ商圏を持っているが、古くからある中心商店街は、昭和40年代後半から盛んになった大型店の進出、特に市の郊外の国道沿いや、別荘地・観光地である隣接する河口湖町への大型店の進出が相次ぐ中、現在は衰退しつつあるということであった。商店街の活性化事業について一通り説明があった後、「学生の方で何かよい方策がありましたら教えて下さい」と意見を求められた時には、一瞬どきどきしたが、皆でいろいろ意見を出し合っているうち、あっという間に時間が過ぎてしまった。

翌日は、宿舎の都留文科大学会館から都留文科大学に行き、和田明子先生の研究室をお借りして朝食をとった後、総務課長の方に都留文科大学の成立と現状について説明していただいた。都留文科大学は、全国でも数少ない市立の大学であり、昭和28年に設立された山梨県立臨時教員養成所を前身とする教員養成系の大学である。人口約3万人の都留市が大学を運営することは、かなりの財政的負担となるが、織物業が不況に陥った現在では、全国から集まる学生の下宿といった大学関連の産業が市の重要な産業となっていること、また市民には大学の図書館・音楽ホールを開放するなど、大学と地域社会の結びつきは深いようであった。

午後は西桂町の織物協同組合の方から、西桂町の織物業についてお話を伺った後、織物工場を訪ねた。そこで豪華な婚礼夜具や、マフラー、ネクタイなどの製品を見せてもらいながら、工場の抱えている問題などについてお話を伺い、生産現場を見学させてもらった後、帰途についた。

今回の巡検では、現場で働く方々からいろいろなお話を聞いたり、大変貴重な経験をさせていただいたと思います。猛暑の中、私達を引率して下さった内藤先生、快く便宜を図って下さった方々にこの場でお礼を申し上げます。

（7月30・31日 内藤教官指導）